

# 震災後の作家に変化

県大教員「人間中心主義に懐疑心」

関東大震災が作家にもたらした影響を語る講演会が8日、土佐市高岡町乙の市複合文化施設「つな一」で開かれた。高知県立大学の田中裕也准教授(41)は日



関東大震災の記述がある作品を紹介する田中裕也准教授(土佐市高岡町乙の「つな一」で)

本近代文学Ⅱが、震災後の作品の変化を解説し、朝鮮人虐殺に関する記述なども紹介した。

1923年9月1日の大震災では多くの建物が倒壊して火災が広がり、死者・行方不明者は10万5千人余り。「朝鮮人が井戸に毒を入れた」などのデマが流れ、自警団などにより朝鮮人や中国人が殺傷された。

田中准教授は、江戸川乱歩や永井荷風といった文豪が震災で失われた見せ物や花街など「江戸・旧東京への愛惜を描くようになった

た」と説明。一方では、一瞬で人が亡くなる地震を機に「人間中心主義に対する懐疑心が生まれた」とし、横光利一ら新進作家が「社会システムの中的一个に過ぎない『人間』を描くようになった」と語った。

志賀直哉は朝鮮人虐殺にまつわる若者の立ち話を聞き、日記「震災見舞」に書いたと紹介。若者が朝鮮人だと思い、日本刀を持って追いかけた人物は朝鮮人ではなかった。が、若者は「かう云ふ時でもなけりやあ、人間は殺せねえ」と思い殺した」と話す。志賀は「ひどい奴だとは思ったが、平時さう思ふよりは自分も気楽な気持であつた」とつづっている。

志賀の記述について田中准教授は「正義を振りかざすのではなく、自分もデマにだまされたふりをしながら、読者たちの倫理観に働きかけるような文章にしたのでは」と考察した。

講演会は放送大学高知学習センターの主催で約20人が聴講した。(山崎彩加)